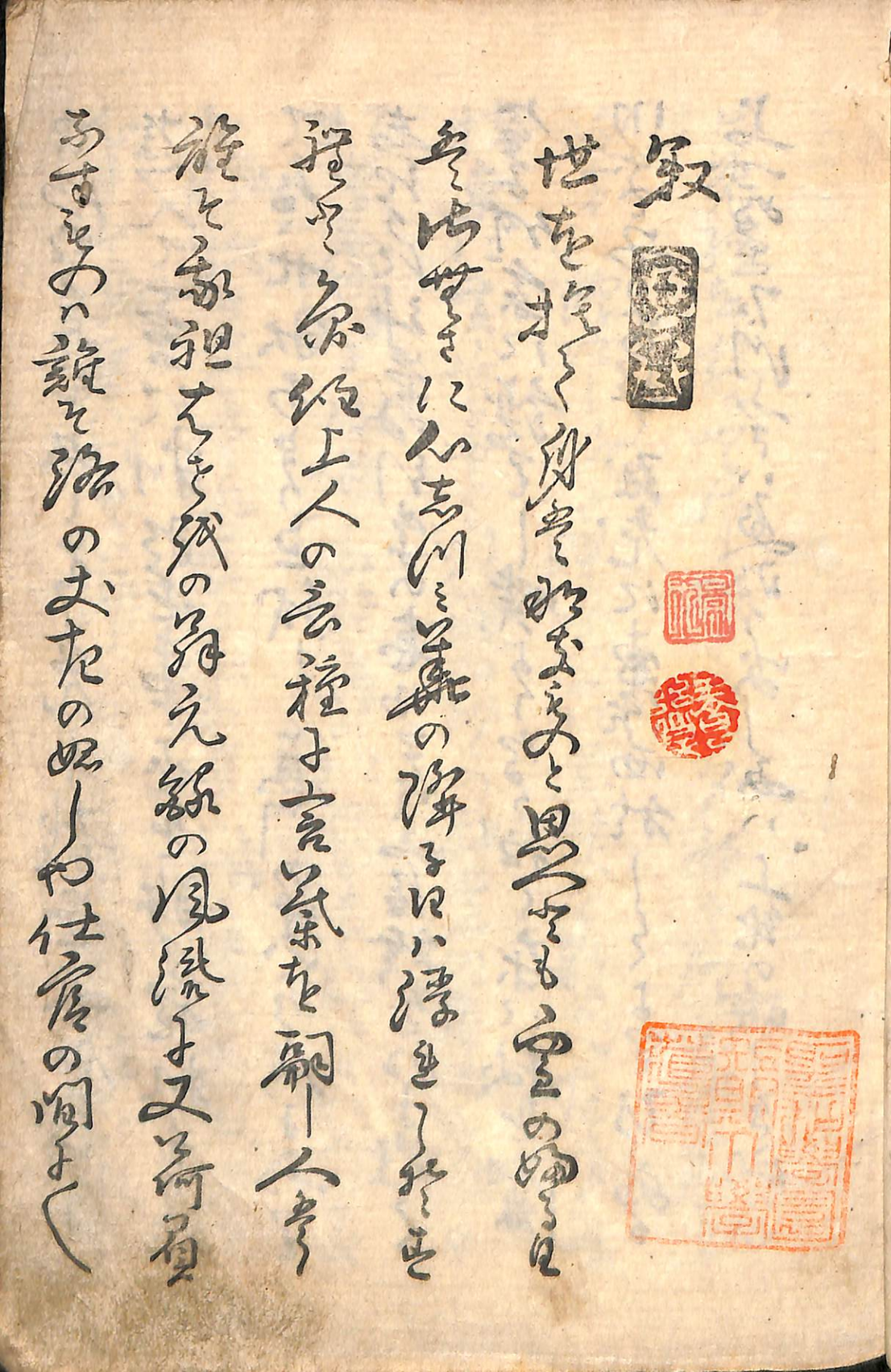
輿地志稿

911.3
才
乾



まゝ時ぬこゝをぬゝ有し先千載豊丈石の門に
遊んで十字に判明を事近を許さ程机を建
て居、廿軒あまりを越し蕉門の先古の法に入る
志ありに計算行李の志ありて官務をぬき捨て
今子何余に譲りし曉より寄り拾く東に杖を發
旧友ゝ多く安程も恐老に東語西話しくよりひ始る
上つぬさ下門ゆさハ更ゆりあしあハ上紀の諭しき正家

に先程を鼓掌世居し根に及ひ夕部を何らき俗蒙
延分に漂泊し孫に世界家に里蛟を薙丈左坊と呼
技案に実分を世と此種や抜くの翻筆の基論を述ゝ
松嶋象深に周遊し難鳴の松のひるく秋の日の入し安
を根に孫旦孫足ら見ゆき松の月ハ海と近に四家色に稀
心し千満寺ハ時旨に舞しその姿を定め家を法さ厳を

家上にも入り通し都て名所勝地に事々の至とも
あつて帰路を望成の里某許に轄を接するそて那に
会て其志の望に志はる所裂を出す至人各籠の
机をさゝめ兼て門の朝夕に鬢髪を撫さしの事や
是近の紀行や彼旦る雪の樹にひとしく一歩にも
隔雅の情にあつら章にもを忘る度さむも本
意那く友人の事を知に彼是線程して乾坤

ぬさ川の里とし其出発行を謝せ叡を能さよと
あるにまつせ東都家場の隠子松下路庵の所にし
東海屋馬帰湯に筆を揮て





宝見路之の此し亥の春

序



墨子ハ糸杨朱の道例諧
又同しく惑る岐いくもれる
進ぞ此さ然と蹉跎として
四く事の重しけ惑ひを晴
さんにて師に手をとりませに

志ゝなし此年頃の新しい
果しく洛の仁佳庵を得て
元祿新正風に此年すゝめる
此門に入る事何の一緒の冊子
を遣さるゝむかある扇ゝすと
法好士と里ゝ新来置る一所ゝ

旬々終南吟と正式新年逸句
案ゝ大慨あれハ何ゝ難髪
乃賀章等ゝ集め秘め置
ゝをもて同じ雖しく此
黙き合様木にも里ゝ多分入
道のたゝ法なにもと題号ゝ

奥者志深学者著作
[illegible]
栗駒山の麓重来釋
鶴出舞南陽也
于時寛政五の
かのし
東夜史

叙

夫風雅之道ハ一也而風与世移
體與時異ナリ故ニ熙々乎タル者ハ文
王之德也泱々乎タル者ハ大公之義也
雖則風移リ體異ナリト又同ジ帰ス言
志永言而已於我俳諧也亦

復爾々（ノミ）何（ソ）論（ン）古今彼是乎今
此集之成也吾嘗小子狂簡斐
然（トシテ）成章不知所以裁之氛（カ）能
裁之而使聽者発憤々決々之嘆
焉者實一無尤師之賜也
于時寛政五年春　　輿金成驛
花朝　　文鳥書

（印）

（印）

（印）

栗津幸仲幸仁ら蓬翁が杖下で俊乗
を称した浄蓮華門老松堂を訪て仁陽昆沙門
寺院で懇会し祖翁法秘書を幸仁に
与えられ、秘事大事を始めとし蓬院の骨秘
を悉くさあれてこれでなきこと仕まつる
志を風原が為に友を辞して世を入とした
志を風原が為に友を辞して世を入とした
れ又作意を辞志の國を捨し東風で生
れ又作意を辞志の國を捨し東風で生
れ又作意を辞志の國を捨し東風で生

めなき事と言かいつけなるて

再

花の春芳の故に於ける茂命を知るに但せぬるから

初々にしてもなるて杖を以てきゝ俗孫等の洞に出る
袖を拂ひおとぬりも見えて行るて世乃らくかはしき
をのうれ里の湖水に向へて水藍のことく一塵
無なんくこれに心を洗ひ松の聲さつくとし
雲津ちうく祖翁の美仲等に詣え祿の昔朝ちに
のきあるを志るひ出るひ松鶴家深に杖を及ぶ事を

告て再拜し膳所草津の俳士より江都に及ぶて名
あれ風流を得ぬに東都に杖を入古き知己なれ
松露庵に杖を休め名あれ風漢等に謁しる事ふ
志て近列にわたれ志に常陸乃國延ゝといへり
知廣てふ教ものを立て風流の志しを淺からはあるときハ
病ふのよしらを以ハ一椀のわけ事かくみに心を
留されも此あるに告ふ雲精舍に入て由とし事を拂
ひ清らく於事を思ひ十年計の白毛にもあるなん
めれるのいふ所あつけおとら流そうけなんと招かきいと
ひしもなくむかしにすりて於由へも哉ゝ恥かはしき
事なりかなれ分のさそしとのりかんつくらく言もなく

い祈れも能るも只風雅芝居と語の世の事推ふ
まて事利人ゝ其本の場の歳の所のやうゝ也
そ家其法師及分院一治なりしなりしなを
仕ゝ能をのも形くロ外利和にちをいさめ歴
めるもの悲おりしに御く鈍ぎるは其菊月中
芝宵なれ且なる事をしし

丈左房

一云

うきの蛾眉秋のまてきたれ

蘿槐姫

到来賀章

洛の丈左房ゆゑひ来りて下りて志雨ゝ
蛾を桂宮秋ぬるゝひ風雅の摩師なり
なりし事を賀して

東都

松霞庵

霞の家皆友と皆今草も本堂　鳥明

同

春秋庵

祝下明し項ゝ志ゝ手し秋時雨　白雄

似合し浴飄讓ら乗 門 江戸 祖風

月に新露に香ハなきわさ下ゆ 今ノ春秋麗 長翠

鳥羽玉の闇も如けこ星月乃人 心逐

時来ゆて身をかゝるの秋乃風 尋花

露と利し人やゝ髪もつゝき 帰童

秋冷し見るさへ夜に入し人 春甫

秋風に姿おちなきからひ 上總黒戸 春河

月に利や秋の情に捨ふ人 同多陽 凡列

出の声世を捨し人を思ふなり、 猶車

多ふの客利しを月乃上吐ゆ、 芦風

清しく塵なき月の新法師 下總芝里 玉谷

行秋も物にたえへし世捨人 日芝谷 中良

利人与松に見ゆるも涼なるに 日横次賀 一馬

世をうきぬ月に利こる染の事、 樵花

利し髪清き月見ん人を是、 秋蓮糸

雲の世也 利てハ月 ■ 光るとら 釈 松菊 日横次賀

なも月ハ人の利しを於ゆふ事 矢屋女 日秋堀

月を友と髪蘿 人芸人 下南、 花敬

利し師ハ萩織 笠を有なむ 笠、 文楚

君衣 濃きハ深しら 秋 乃風 釈 蓼翠 日八吉塢

たの如し 流居士衣 姿よ 月 の秋、 巴洲

忘ハ月ハかえて黒髪 捨しよ乃 扇芝

幼あるま師を此秋ハ生れし子、 顧山

松香是秋ハ吹 うせて師をとめ、 蓼也

世を秋 流風と憶らし 師やたのし、 柳糸

利髪のあといとひまあり 秋芸風、 蓼語

月ハ秋ハ人 富手を素 門、 蓼花

秋ハ笠ハ俗を放れる秋乃人、 其翠

世を頼く吹ゆく人よ 秋芸風、 由耳

皮線も捨しよ 月の情 志里、 吐橘

咲かえて 古名を薫れ今年 菊 同猿田 弄瓜

髮蘿て器に和れ月流れ　同塚本　如柳
秋風は入れや君の尤らん　同小舟本　滄浪
月に世を捨めて秋を望らず、　无有
髮蘿て魂流さ月を秋、　同明尾　雷如
世を霞れ悟りし人流故に呂を秋　常陸筑地　安慮
世に捨く利捨て秋を[redacted]友れ　同辻　樂道
悟て思ひ晒もおもし胸の月　同延方　知廣
雲の霧の霧てなるめや月の色　同潮来　籟如

浦やまし故人を秋も叶秋雲　同延方　休保
居士衣思し分ハ安うしん月の秋　同辻　渭橋
居士衣こ捨世に安けなれ鄙の秋、　五粒
思しき姿や月流九うしら　同大渕　桃里
世を捨し分そうらやまし月の友　同筑地　喜樵
流れ山さくあるを利人よ　定羅
茅秋流垢や放れ筆清き人　同曲松　高無
世を霞れ髮蘿人を秋ゝのし　同辻　虎山

上列高平

髮薙し人共故、呂を秋乃月　是牛
かゝり焼し頃ゆ似合共岡雨、　亀嶌
雲霧の世を後のゝ月乃人、　一儿
世を秋の孔象り利ぬ共乃人、　椿臺
笠の孫りよまれもおもし秋乃風　同沼田　麦泉
利て猶よしとよ月共似合如星、　琴雨
髮薙し分きこらやまし月乃友　同京良　如舟
利捨ていかり見し夜をふ乃月、　西郊
月り見れも猶こらやまし丸頃、　其雲

風流の志をこの如し月乃志　同上白井　南交
佛を西行よ月り利し人、　小星
秋風やあつてこさくも頃ゆ如世　同保吉保　花明
いとひまち入道もし見秋乃風、　土髮
霞なくは秋利しあてまちぬ、　木葉
秋を友り利る人を羨し　同榛名山　如雀
あつもれや世を利捨し月乃宿、　和什
たの如しの師や利捨し秋乃頃、　賀葵
世を秋と頼く利られし師やまし、　令芽

秋風に障るものなきかしらぬ、雲裡
あるかくさき世を返さし月乃人、梅宇
利捨し人こそ人よ秋の月、画龍
雲拂ふいてき見よし秋乃風 同言葉 雨什
利て世を秋り捨る人ゆゑし、芦舟
世を秋り見かえて利し人なし、自来
利捨て世を見る人ら秋乃忘、一峯
月に利て苔の香もある天忘ら、玉芝

十治の忌ナて呂いかり秋乃風 知二
世を秋の柳少し成て吹るなら 江刊多賀 其由

歌仙

利捨し磐きさなき秋乃霞 丈左房
月にもしめ新宮乃と宿 長翠
萩白き篠屋ハ霍の名所にて、
九尺もかなり私造足れ 左
鯉竈に多をよそハ誰そ雪の暮、
まつらに歳し猶の頤 翠

鶴の跨をかき習ふ江戸乃来　翠
　　是の諸侯の果しむる雨　左
ぬらけし薗の物利り弱遣て如思ひ　翠
　　いまれ始夏を葬り位　左
薄やらの文千とせなれ国乃自　翠
　　二位なしたるの籠乃玉むし　左
仙なき鶴り浴音聞なれて　翠
　　合笠なるへ玉房乃雨涌　左
祝よりて盗人帰れ小咫乃奥　翠

　　條屋の抓草りつらふ　左
撞もせて掻り鶴し神乃鐘　翠
　　八重の霧り車とろく　左
天正の伏見り橋の数かけて　、
　　夜あるき習ふ意を恥のし　翠
、なるゝ謡りもいけぬ袖乃涙　、
　　樟の弓り人も志氣よ　左
ひゝ鬢り樟の青葉を摸を捜　、
　　沼泉の香寂しき浴湯の隠見　翠

小印紛り世を隠しこれ骨董け　翠
鳥りこれ出乃菓物　左
笄の戸り狂女の笛を歴こて、
維栗り音あれ社の神風　翠
蘂動の新りされる月ハつ　左
酒りうつさん八朔乃霞、
丈山の新の庵花四つの時、
帰蛛見る杠の風白しなき　翠
笙の幾を吹るを琵琶湖り揮さて　左

うをうかゞ見んとなつれ盃　翠
よくも世を童り帰れ人の花、
古根の菊の春志つゝなる　本

四時發句
毫頃任到来屋速

春

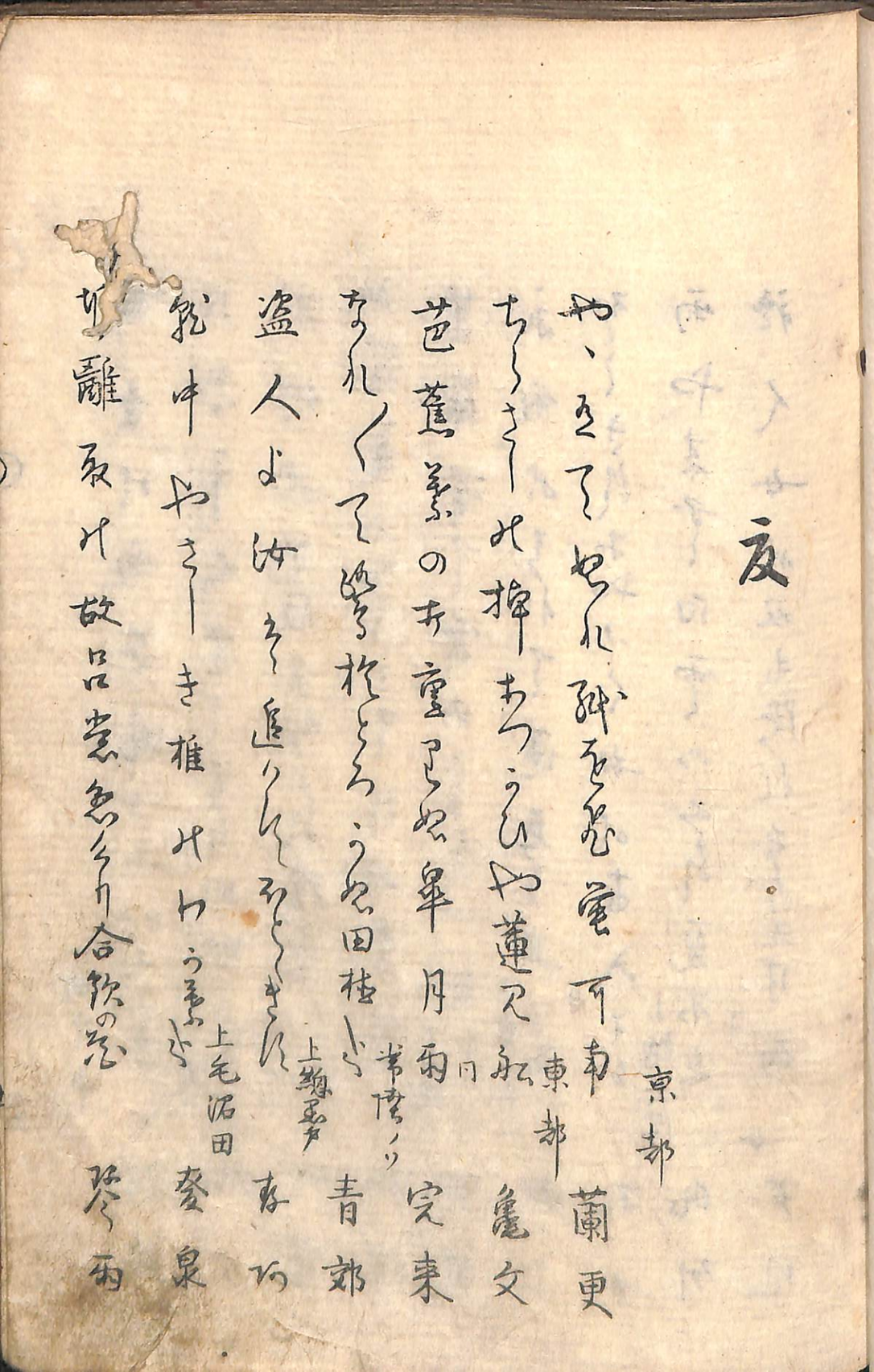
人連り狂女も去れ彼岸ぶ　東都　鳥明
ゝ家ノ有の梅をいつ咲人女乃花　尾別　曉臺

[illegible]て帰[illegible]る障子[illegible]　八王子　暮原
[illegible]て梅の香[illegible]　[illegible]　徐風
梅さくや礎を維住し　上毛　詠　清風
[illegible]て[illegible]馴て帰て[illegible]　京都　東鳥
枯芦此枯より[illegible]て[illegible]　日　林[illegible]
[illegible]も秋呂き洞こ[illegible]　上毛榛名山　和什
山吹て[illegible]むく花を[illegible]　日　金芽
[illegible]て[illegible]て[illegible]　日　雲裡
梅咲や額言し子此肩車　同　[illegible]　自来
[illegible]　日　[illegible]

雨の蝶うきややとりしわ。の秋　上總曽我野　如帛
春風や馴て[illegible]　同　富田　土乃葉　亀足
若草て一色ハ秋の花もうれ　下總横次頒　秋　松菊
[illegible]き日や[illegible]を[illegible]も[illegible]　樵花
蝶花て如月の[illegible]　同　御所臺　[illegible]　兎乙
[illegible]七日[illegible]女[illegible]し如春乃雨　同　春[illegible]　来之
寒食て一ツ合子を[illegible]　同　八日市場連　巴洲
已ゝ新井[illegible]て[illegible]柳[illegible]　扇芝
[illegible]て[illegible]て帰る[illegible]　顧山

[illegible]おれ草に新し夜し角　蓼也
山ゐとり動く程ちより猫の恋　蓼花
おかたりの恋にハたゝ如様ひ　吐橘
古雛やうらやるれこれ嫗の年　同野尻　雷如
様もろうて然しまゝ春の梢ゝ　同新塚女　矢屋
おかたりのまことをこゝろなるゝ　文楚
雨たれの音も森也利し　春の暮　幼見　寉子
雨ゑくうきあり蛙鳴に　同今泉　吐雲
夜やせん[illegible]様の恋白[illegible]　同[illegible]子　桃源

世に様ぬものよ唯一郎の味なきも　同　百寸
恋生淡柳這子の及ひ[illegible]　同　香[illegible]坊
ゐと谷や作けて八ヶ山さ九郎　同松岸　京花
雨うらゝ蒸をしてる雲の[illegible]　同[illegible]田　百二
薄盗に踏ましし深山堇ゝ　岩陸庶好　車童
椿咲てまもの三月に修[illegible]　同　馬紅
様のまれぬさ九ゝ流るゝ御構水　同　忠恕
さなくてもゝぬきけらし腕月　同　仙風
たんゝ[illegible]の時に黄そそし日和ゝ　同　如扇



同宮平

楠葉の雨を帰りにかんにかる　羽觴

月雲にくもりて風紗を蒙　同白井　北里

旅館の笠仮を白ゝれ浮雲ぶら　同榛名山　如雀

山駕籠のちらしてけぬ蒙　同　萩　柿宮

菖蒲葺て雲のうるき一夜ぶら　同宮縁　玉芝

永雨のあれて蓮見る且うれ　同倉ヶ野　知二

ひとしきれあやかく母の森入　同　たな　松女

雨や来ぶし白雲めぐれ夏木立　上總矢浮　凡州

独人女の双も隠れ今ハ五月雨　同　女　芦風

取来て独女於今ぬ夏乃月　京都　宣橋

五月雨や蒙の糸乃よれかゝり　下總横ヌカ　一馬

皐月雨やいまゝ戸さゝし見ゝ園　同春海　桂文

雲ちて氣を吾庭や五月雨　同小川　新本

ま驕牡丹に風のなき日ぶら　同八日市場　蓼翠

山里に住力あるゝうぶし古　同　鳥　蓼許

小車の轍の水や雲　同古川　雨律

白雨の寒ゆるゝ　山枕ぶら　同新堀　花敬

住の森さめ雲よりけれ不とまれ　同野　紫石



宮中のわかの篇下紫りもとれる里　常陸萩原　鱗々
象深や合歓を挿頭り霄乃月　同　廉修　寉語
更衣脱て見えれて脱　同　新ヶ湊　翠兄
薄　岩下安　うらぬなこれ　上列大久保　里恭
百性の相場　顔や夏乃雨　同　白井　澤雉
夕顔や点出り日を請て　同　伊勢湊　咲　輪太
夏の雨むしく童き鉄合羽　同　木修　天輪
卯の葉や蒼し陳屋乃点白垣　同　風狂
月代や霞持雨後の二重し　同　井　紫泊

涼しさや戸をつき寺の湯梅　一魚
年四十歯り夏ぬ　兄へ　多利　武州鶴泉　仙風
夜の衣志めを限り門を　同　風仙
順礼の月利志て居る清水　同　梅川　志風
臺駒の一ちきまくわ　江戸連　類家
文見連も都も如化り皐月雨　自橋
手雑くは咲ぬ牡丹の蒼の家　水古
於もふけ啼て鶯老り多利　下總芝湊　柳徐
桜せ望先祖の法や夏木立　官城

南總連

なき舞ひ萩ち散やつゝ細ヤカ〻白琴
上の物をや伝万一石ゝ青田つゝ玉城
上に先ち田ゝ蓮沼雉丈
上に先ち田ゝ蓮沼雉丈
上に先ち田ゝ蓮沼雉丈



[illegible]きたしめや今朝乃禮者と 同辻 謂橋
まゝひ度菊やいづれも二本ゆ 同曲松 高無
水の上越んとしてを秋乃蝶 同大渕 桃里
二つ三つ處ゆこそれて藁の花 同築地 喜遊
不稲迄て中々ゆ黄をむ蚕ゆ 同辻 鼠山
その語見さ次瓦燈乃秋をゝ 同イタコ 五粒
されハ〳〵戸さむ水あ了後の月 上毛沼田 懺城
川二漱啼〳〵床の越秋ゆ 同高平 一儿
薄暮や草の五尺ゆ處ゆ 同白井 菊交

蟷娘ゆ腹立させる童ゆ 同高濱 鳥水
篭なるゝ多買れ行秋乃暮 同友国 芦葉
人去て石とのいたれ秋の風 武州松山 二川
見臺の折〳〵くらき芭蕉ゆ 上総ヤカタ 猟車
暮の柳鞠より先ゆ處ゆ 下総八昂場 葱也
ゆなりの夢馬盥ゆ及び行 同 其翌
夏の世芸ゆハなるもせの種 同 飄 由耳
[illegible]と見し雲をいつさりの朝の秋 同横スカ 蓮糸
[illegible]るく寝月ゆ帰ゆ雪ゆ 同[illegible] 亀遊



啼や関路鞍れて陸乃霜 同 猿田　駕龍
頁角力笑ふて這入力うれ 同　石城
うちとし叔きるとし秋乃水 同　長凡
月待や障子ゆ更し出乃声 常陸清水　砂水
秋の夕とせしかり故、呂定め多り 同 庶務　村江
蔓草の陰ゆ あるかれて秋暮の 上列伊せ湯　赤聲
川一つ碪ゆ里き うぬさ也 同 上尾　木奴
中元の月や沈めも名ゆ立れ 同　枚雨
岸の一葉ゆ浴せぬ なるれ 同　岡郷

穂ききや芝ゆもなき辺里乃 江戸連　青城
いもうりゆおしとや嫁ハ秋乃暮　根塗
くふより羽立きのふよりくふちれ柳　鯨路
かる人の皆御来なり御迂宮　波江
罵引やいさよふ隙ゆ二青り　可名
星合や淫の奥もかつらもの　岡水
秋風や森へもよりは庭外れ　魚波
さたゆ見る命りもそそ稲乃花　庄来
古里の新人ふくてゆゆ見かくり 下総誕子　ごろる



冬

寒月や何かはものく敷り浮 上毛沼田 非席
肯来り浮て隠るゝわられ 同 ゆら 暁酸
咲りそれ志向り冬乃梅 一 同 素十
里の竹や何を世をかの夜乃雪 同 亨平 是牛
林浩深て そ乃鶴小坂 同 ゆら 鼎山
行水や夕日つれなき枯 柳 同 亀蔦

咲ましの雪や敷下の袖 秋 同 椿臺
涼蝶の石て分を金命 ゆら 同 岩瀬
末うら秋や暮て小遥て紙 咲 同 京良 如舟
水張の火雖ふく夜や霙 浮 同 其雲
小山や木の葉ちるの雲乃 晴 同 西郊
入定の会佛を消て霜 柱 同 伊香保 土髪
温泉の雫鶴くて水せ 里 同 花明
羽を志めて啼や旦乃霜乃鶴 木薫
蛇の衣涼清く岩の崩れ ゆら 同 水沢 水語

一つれ築て動きの底葉かくり 同榛名 賀茂
冬籠里火炬の上の神木とし 同 西龍
裏山や浪の氣こちて冬雲 同若丘 之得
かく風や蓑を出て神さき 同東金 雨亭
冬の人女見越を月て忘光る 同安田 紫岑
寝物の論ひけらし今朝乃雪 同 釈 連圓
山茶花や余の孔井て年ハ見 同栗生 灝陵
雪ハ枯て鮫噪ぬ夕 下總今泉 自曉
春といふ日の短さやかえ里を見 同太田 五川

立ならぬ雪駒のつゝや夕時雨 同小舟木 无有
冬籠里初めて癒後なるめくり 同 滄浪
傳ひ行雪の木履や外 同浴子 廁 芦帆
雪の夜の火乾なるかし東山 京都 感之
小原女洗来馬いそくしかれ 同 其巖
蕪ト の枯葉て寒しかれ 大津 和童
風立て小魚賣さるの日陰 同 騎笛
おもるおもの隠居ぐらし乃巨燵 東都 豆花
もしらしかれ富士を此雪乃去西かも 下總ヨツミ 夜松

許だてき六角堂の月秋の事 同一万載 碧泊
雞の樹をしたれて菜 東都 心逐
枯物る拾子讀ふ雪の事 同 宋居
乾鮭の鑵吹ちらしおらの月 京都 サカ 重孚
冬の木の如き少し多の帰 遠刀六 百剛
其の寒の氣を見ん雪乃上 江大津 兒眼

漢和歌僊

螢 諾ニ 落テ 叢ノ 燎モエルカ 丈左房
上列 伊香保連
ナラン里少し降て夕立乃 罷ヤム 土 髪
童 嘘フイテ 笛ヲ 傳フ 阼ハシノ 花 明
駑ムコ 咬クヒテ 弩ユミヲ 游ク 濱ミツヲ 左
天祿 高き月光明の火を焚ふ 髪
貴意を洗ふ秋乃 詩 明
愛テ 菊ヲ 忘ル 吾ヲノカ 齒ヨハヒヲ 左
蹴ニ 籠コム 磧イサコヲ 綻ヒノ 齊スソ 髪

志ゑれまれ始掃演乃夕を下　明
あらかし乃志れ冬鳥　呟ナク　左
凝テ　粧ヲ　娃ヨシナ　投シトス　鏡ヲ　髪
霊タマ人下のれ意死の戸カラ　明
猿ハ　跨テ　崒イハニ　搴トラントシ　月ヲ　左
鷭モスハ　巡テ　朶エダヲ　乞モトメントス　塒ヲ　髪
房童き袖下鳥帽子を携乃し　明
御次く若風寄こ堂吹　左
惜むら久花下弥生の年日まて　髪

近ク　臨テ　汀ヲ　得ル　蜊ハマグリヲ　明
陽炎下旅駕志れ雪乃下　左
戴ク　頭ヘニ　千　載ノ　幾ホコ　髪
隠　袖ニ　五　更ノ　琥タマ　明
むし若志るし乃兀る　疑フ　左
惑ス　心ヲ　錦　木ノ　契　髪
新下螺ぬく煙き　願ヲトカイ　明
御侍の志尼ヶ粥乃毒尺志て　左
裏下かなしき詩乃碑　髪

拔(ヲサヘ)　操(ヒカル)　雲　龍ノ　質(カタチ)　明

如シ　旭(イケルカ)　名　画ノ　亀　左

月ヲ賀ス　白髪ニ成シ　百ヲ扶　髪

深ク　しのしき　法ノ　芝　籬(ミヱカキ)　明

焼栗ヲ　混茶　俺ニ　成　浪の　奥　左

訪ル　レ　舊(キヲ)　鳥　居ノ　岐　髪

深きトの　深淡きヲ　續くミ　不つくし　左

たるゝの　谷ヲ　石　摩く　槌　髪

蕊テ　レ　時ニ　花　既ニ　發(ヒラク)　明

酒盃　なめ　合　相ふ　若　芝　左

上毛ヲ　杖を　寄る　沼田の　宿十八　坂ヲ　險

沮を　おろす　白井ヲ　いへれより　伊香保　榛名

山ヲ　みんとして　深山ヲ　杖を　惑ひ　人　法

さらに　猪康ヲ　語ることも　なく　杖ヲ　拍　默　吼

て　黄昏の　魂を　削るしんと　ふれ　谷深

う　もて　長を　断　帰るんと　杖を　入れ　山　ゆるしへ

波わるを　ア　那を　一命を　惜よ　手　こそよ　宿

雲水の身をや主風に笠うち菱松
枯をよそにしたにうり東の夏陰りんと
柞日宮て　一无

家貴芸今もなりけ重雲乃風

四時の月

ちる軒や浪漾堅の橋浪家乃月
文山や月を重けて茂子の上
毛一筋着てかゝ里て月佳し
海風は冴山月て礼まゝ里

妖枯し宿て古主をたたくこて　左
さゝ豊酡賣は遥き　翔日　右
枯本隠神をもやらば西の京　胃
射場を乙矢て呆る人ある　左
手折んと此ほ花の香乃袖て落　右
夢てうき世の理屋なき春　笥

此半面乾ノ巻ニ加ヒ

名あれ風子の志を以て霧の若
夏を殺さんとせられたる様を以て
見て曰俳諧可 波多芸感ひ
あり新くは俳諧を教へ給へ
いふいなりしていなりさく教るは
こちらは志らは唯ゝ俳諧の様も不和は一つ
ぬらしをあらに巻て風流乃和語
と異なる事見る人も様を以し
こまく

俳諧を俳優の舌可もとにきて滑稽哉
吐とは二字をなさるものの可教るはいとなり
足下を俳諧乃風漢之拙初て和らき暦日雖
せ乃れ上て四時は変化を矣へ其は且可青
白の陽氣をもとゝ光状の夕可腸を断夕就の
有可浴志て衣を震ひ鐘打ゆれ名の枝
流炭を可異を焦志の小酒拭ふ鉄衣はい
こふとはしき鋼代ちゝ然ゝいとなしよりいちの人の
五穀なれ車は御簑ふうくこ様也葵拭ふれ

隙より利蕙（タキモノ）不の薫ヲ見て心ときめ起こすなし
此衣乃裾引意路より性商てるうれ女の
つゝ若間乃志のひ合ヲ得むらを旅し菩提の
原ヲ入て涅槃路ヲ黒髪をたけ後の世の
こち又於かしなと人さぬ山荘ヲ蔵ヲ閑
古今閑友さへ古人よし此古き史取ちらし
一今志ヲ有もいねば親会の頼枝ヲ天地を
見和らきこゝ川六ノ津の唖を吐て微雷於とり
き毫を投れて出る志つ乃ゑ芙蓉を夏

見白扇を拾ふの濃ひも俗諧の和とし師ハ
一ふを飲て次暖を知那（ミルナツ）な膳を揺る主
此曰句ハ曲首あふきを下界といひ平諸あふきを
下俗と云諸笑あふきをうき世といふ漢
諸なる所を檀林ヲ蔵入ゆゑ彼を嫌ひ花を探
いつれ取ゝ上界の句と云ゑきや答て曰夏句ハ
先心を頼とせおし見あてる風景式ハ月
花の如くひ言句ヲなさん此欲ものを好ゆゑ
ものをおし心を頼と無情を有と世よとのるゝ

たとへ花をなめて格はしに成る心目り
ふれ見ゝ孫菜にあたりけれて陽光を乃ことく
動き移るとよき刀を拔て見るに自ひかん
をしく切先を解れてもの嫌るやうなりを
をんとゝ此情を白無り合て鉄を姿り
なきを蕉雞に舌骨を得るなる事し問て曰
鉄を姿とハいかに答て曰口よりかゝる事皆難
ことハ読木の裏り芽をおもことく答と唇か
なて姿と成を手り筆とつゝかるを筆といふ也

又問て曰切字に事功者に上りハなくても
そるしうさ鉄也又なくてハ叶ハさるものりや
答て曰なくてハ叶ハさるものと功者の上て是
そるしうれと是功者に白とて切字なくて
よきといふりハおもひの切字云るあるを初いの
家りてハ及さる事也仍る功者に上りてハ吉
姿うれにいひ得るとも初りいふことくの乃
変堂ある事を当なる性ハ俗僧の上手ハ先の意
を脇下り弱めたの也一句りそし得る

肝要之心弥々さる人の句是上眼の作意に
到られ仍て功達の名を得る事かくのゝ通し
和歌に花実あるを俗諧に同じ意を工め
深作意ハ其事やうに於てかく志て情薄し実
を好めれ句ハ哀しくあらねに志てり我の情
深うる通し

名月や掃ともく松乃氣

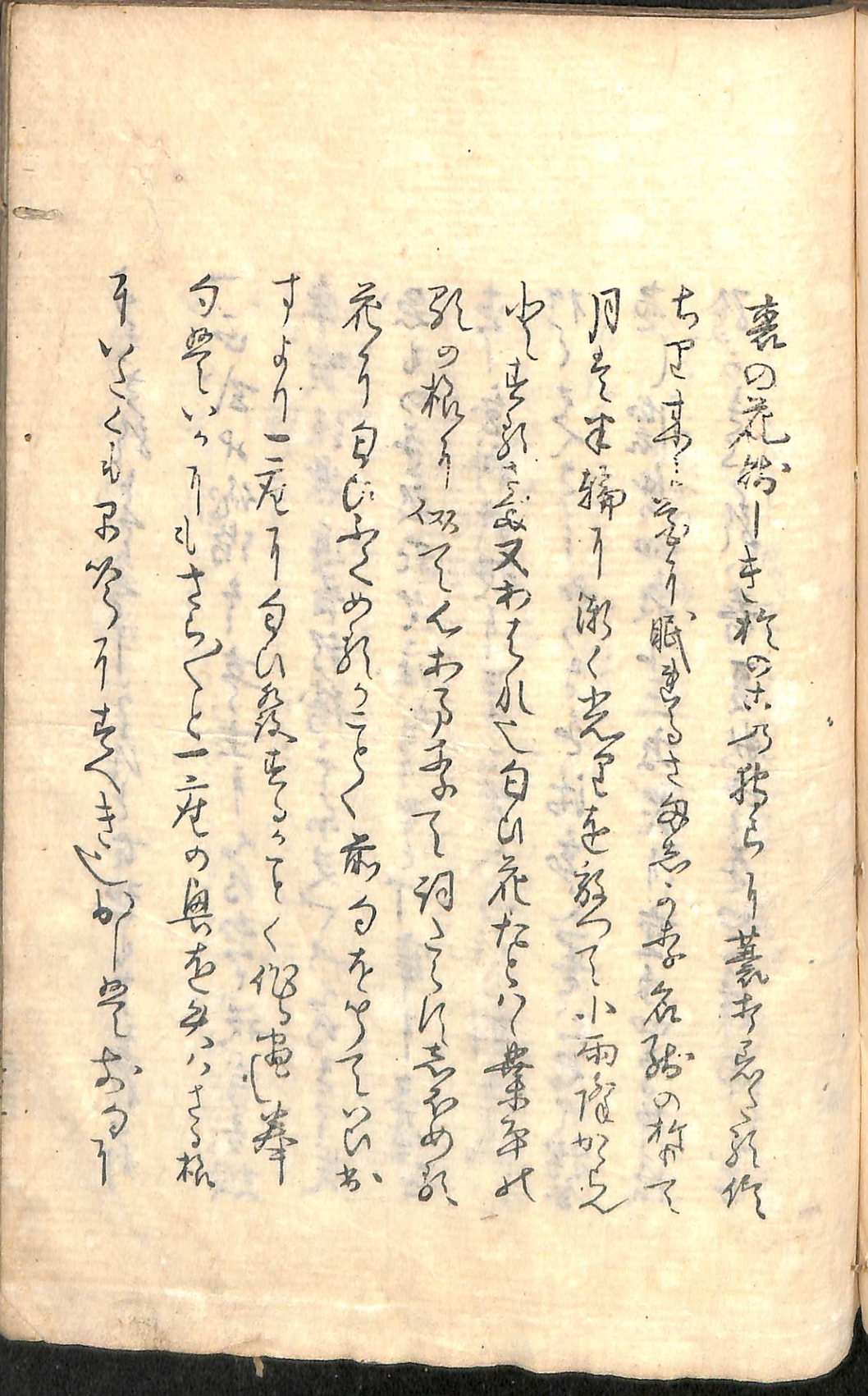
此句は、如の月に己ゝ心をくはれ松ある事を

うち忘れて塵蔡の程を掃ひんとてきに
地を穿る一心元と放たれ超えたりて富士
山の氣のうかゝ見れ海上に掃さして山上の
布望たれと、家を忘れ海中の情を多ひ待
れもをなし敷くなれ葉に一心とし得る
を自然の情と云問て曰發句ハ実を以て情
の自然をよしとし連句ハ發句にてるかを利
雲実の変化を当として先照り發句の余
情を請韻字にて留る事いうまでも答て曰

海上に船舶が多く見えるのは、本船の位置が陸地に近いことを示している。
また、陸地に建物が多く見えるのは、港湾都市であることを示している。
本船は、港湾都市の沖合を航行中であると考えられる。
港湾都市には、貿易港としての機能があり、多くの船舶が出入りしていると考えられる。
したがって、本船は、貿易港の近くを航行中であると考えられる。
貿易港の近くを航行中の船舶は、入港または出港の準備をしていることが多い。
よって、本船は、入港または出港の準備をしていると考えられる。

又志の州正武乃俗諸りて心得置きるゝ仍る四勺めに
私をいまして拭るの魚皆作るる口傳しわきてこれ
枕乃月大切し師傳を請置きるゝ表り軍陣
を於古人の名女等けやかなるものあるとそい
うに答て曰故人の名ハ忽左ることく作る事し軍陣
を雅なく月お度作るへし女ハ毛氣をいとふ事し神
祥を禍神をなすへし任吉正津作れ和歌の神を
ゆるしとなん又問喜秋豊塲所りよる寄きいかに
もなす事を不有ゆへ樓者人なと他の季の月おし

のち三勺も吉とし秋の座とし秋の勺をいひお
きとき居しとこき作者なりれく毛氣なりくまる秋
りなすへしこれとき置てゝ男ひ歌ゝ秋乃
おしらひ志ゝ秋置きし好きてゝ其置き事にあら
ず短勺ハ手り筆と見又秋のことし短勺りも
ゝ作勺りもまり筆なく連歌作る事のこれ時ら
なれるし勺無り手ふ筆面り志作ゝ男ひなき人の
わさなるへし枕又軍ハおりかりいさきよく作る事し
喜ハ男女の情をなく男り女を向ひ女り男



よろされとてくるしうれと古哲も中宮れ利
一正式は御階を高主り人ゆあり祝言爰想
年頃法楽追景祈禱ゝ事ゝ夫々ゝ人ゆきて先
急ものを設花生床かきりなと丁寧り文臺を
直し宮科職現り第二發入つれも鞘をたつし
於くたくさしみつきを添宮し墨ハ置て摺宮
直し懷紙四枚を二枚宛り重手四季相稱
殘うきたれハ春夏秋冬をわかの庫直しむす

こも里より但し席数勾は會りハ懷紙席上りて折
結る左懷紙ゝ代文臺り載於く直し置て一順也
宮結れ會りハ本懷紙りこつしあるもよし又ハ懷
紙を懷中しお席ゝ上志てもよし宮道の先圖
り隨ひ直し一順志てゝ作るゝち多人様の會りハ連
宮延席志て與を見し結る左置て一順ハ本懷紙ゝ
こつしあるをよしとて連宮十八人り隨ひ以後も
おれと見ハ論なし志うれはとてあまり多人様もせよる
ものゝ一順深て再遍一二勾結おれをて書一順り成

作るなりをよくと出書一頃といふ連爪乃人数祝を云
書一頃のことし小引二抱を左の筆かゝしの門に金
遊し硯ハ右に懷紙ハ其中にうつ紙ハ其上
金もの之かさ山祝 口作 文祿ニ忘る遊ニ於一座ハ宗道
に但し遊しさし合ハ文臺に但し遊し 但シ其日の文臺て云 本を宗道の名明 人なし所ハ今も有文 臺とハ花筆乃ると
連爪ハ各々宗道一礼志て名れの方に書遊し
亭主ハ末座に招て各々連爪掛ひ作らハ宗道へ
開席を乾ふ遊し 作前に香を聞き 香ハ亭主
後之 魚との山水花なるの乾なる合にハ座香なるし 香え

こゝふあるとそハ神社を納あるハ其人なとより其樣取事ハ
合亭主とさ作 色きい人乃なき合に なれるとは時香え
と名号 香をたかしむる書一頃の日茶たを杯を持ふ
一頃終てされを出し宗道より平座を觸るとは時
知仕なるもの前に を取る 此懷 室硯をし座懷
紙書ゝ志らさ紙ハ服より見作るて 抽きとの之 忘て
習ひ家遊し 相又毎遍終て書一頃の首文臺より
宗道へ 此ゝ事を告る宗道取あへ連爪に觸る也
其作書一頃のことく茶たそこを持ふ書一頃を觸

侍る物君席を立事ゆるされ再遍のうち一人君かゝる
り立居し月ぶの句り次の句付さるうちハ再遍とても
立居うれ句こけを探事し去探事より句前よき
人を名さしてこ觸る心めとより連ゐれも二度慣れ居れを
多度利を居うれ書一順より、句こけをいとはれ而く一
句宛なり侍る心此時亭主宗匠此前りおて今日乃花ハ
誰雅丈り御このミ中居こ故侍る杯中せハ宗匠一座と
一緒なりと拵持を亭主雅丈の前りおてされをこのむ心
雅丈辭退されとも亭主不見ハ一ハ無恐なされ之ハ

杯中宗匠よりも拵不見まる心志らハ御免り詰り一
仕やと請事心奉句もめ此去奉句ハ今りよりて亭主
なれるもあるを侍る心千今此時宜り乃ゆるなるべし裏
一順此神の花と奉句をさし侍るを書一順り及てハ
而こ句こけをいとはれかうちなるをの座ゆる侍せ云へき
物なれハ心仍て花をさゝれし時亭主御不見ニ付今日
の花をうけ給ハりハいつ也も御免此杯一座り拵持し
交事心相付殆花の前句を讀よる時宗匠りむこひ
志うらハ社御花を侍ると拵持まて句案を亭主

香を像あり粧そも山れ子種のたくひなる様とのりハ
座香なるへし 聖像を鉢るを正式のあとにあるひハ
蕉葉追宮ありハ千人の像を鉢る自賀ありハ西鶴
象松斧あるハ寒老のたくひもあるへし 其合席の様子
り随て宗匠の人ゆるある事きまるし座香り頭ハ表一頭
讀上るうちのこと初神めり云ことく像前り香を献し
其煙のかんをしく縦上る時花の匂をいひおもし仍て白ひ
の花と云此日の花ゆり此人りあるを匂他ことなるし諸
連流目をかける肥わさなれハ一座白ひ多なることく

いかりもこの毎しく作る事し白ひの花と云る合て香を
粧座りハあらはし一匂を白ひしく作る事きかゆへし拳匂ハ
思てんゆる金極なくらひおし 用ありて滴座をへし拳匂
りて匂葉りひ刀を入るハ一座乃ふ奥しあるより此も
ふ吟りなる事し桃色ハ拳匂を請取書終て讀
上座懐紙の四枚を抜へ一ツ下を上て花の匂より讀上粧
操をし讀て起礼をなし次若又神めより匂をあけ
ゆて宗匠より手傳らハ起吟讀上事し終日の方り
連流迄居奥を見さぬ様り花と拳匂のこと讀上るを

ようとしたまり小引をもてしたち作るとち根に作得
つゝみとを書筆にちのるゝ事なとも得作りと云そも今
りよりてそれ取憚事のり書作るゝ書殘てゝ事を硯
箱り入ん志つゝにしたさしを收めいせんのことく憚殘を
うつ御根り金文様をのせ小引一抱おまりさるをゆゑの
事かえし此内り金硯此蓋を筋違り取てこく
於さめて文臺此上りのも亭主おてしん志つゝり文臺
を請取像なり侍ふ各ゝ想辭をそも山水花鳥此
類を拭ける今りハ想辭なしん御覧し桃原ハ深く席
を次へ立て拭由各ゝ宗道り拭好も亭主かも日断物事

殘日御苦労りと連尾か拭好も来りこみのるもなく
めてさく滿座なりと拭拶なれもの
文臺桃原此殘ハ開席前より東席り座志て宗
道より文臺立此小と發者あると事答なく一礼志て
床おりまゝ事ハ有れし丈より繰ひて文臺りより
五手をうけ目ハ分り持お思て事金席斬し
よくくんを志つめ右致つくりてめ志つゝり硯を
於ちて文臺此服り金ゝす寸法あると殘て蓋を筋
違り取角違ひり金口作板墨を摺思て真主乃
摺金作れハ只事となう候事ゝ摺根口作次り筆を

取いつき二笈のうちまりあるを取上て墨り除る
筆持なるから懷紙を蓋の上り取出しうつ依り
小川をこそ上り金文結をのせ紙に有一枚乃
懷紙に依諧之連歌と書いかりも極さいよし文字
は取上口傳相承句を書體容はわつちを爲す
懷紙書格秋の里は草乃風り取ふ二とく以ふ
事とき此規り吹くことく書とのこと初めたく後細
く墨次ちあり名は後のあり書はとく殘く
句は請けしたるとさし合ひを探んとて懷紙
をいく度もおもしく見さるとの合ふ所さるを取
て

宗匠り仰ふ趣よくく句こけを探見し文字をうさ
源は依名りて書よりこひく多字同作る、指なし
おて字を書屋ふるは筆を樣筆を作る時は筆
かえしが穢先かしおしてと文章り無し必硯箱り
入趣ふるは句を請取り上の五字を請次ぬ七五
を一時に請取し短句一口に懷紙りこの時口
門に吟し相讀とする以上三度に宗匠も人は句は
自然くし合ともあるあり趣し若又滿座なきとち
以ふのこみなる半いてきけるは一座は宗匠より
ゆるして

席を立せ給ふ時文彦ノ人ハ御里宗道ハ御さふ
居ハ大るなかれかわらはしうに連歌ハ小詩供奉を
いましむあふきを唱ふ事ハ御詩を書ふ
度く同しかをおもふ事ハ一事にて書ハ
さらとまきハ御ふ句と名ふて句前を化へ讓る
事し御代を礼ふ事ハ度く世を立事ハ
こまく立ぬりも庭礼を言ふ事ハ御諧ハ詩
歌のかりし立とも心ハ向上の一路ノ者ふ通しと慕
も教へなひし俗語ハ事ハ必ず情を泥濁

三十九

ノ得ず事ハ又うきに捨んとて責
ハ發る葉ノ九條玖山公御門ノ松永貞德御
わきを分細川玄旨法印第三皆し連歌ノ四句ハ
より御諧をつけて一巻ノせし集わるゝ又此ハ重き
御方の連歌ノ俳諧乃わきを分て百韻ノなせ
お里連歌を知ふ事ハ本ノ外を聽ふより
拙なし世の連歌師ハ此を見なく御諧師を居ノ
うらきとのなんめ里なとも御諧をおとしめん
口をしき事ハ此人ニ乃非をおくるノおらは

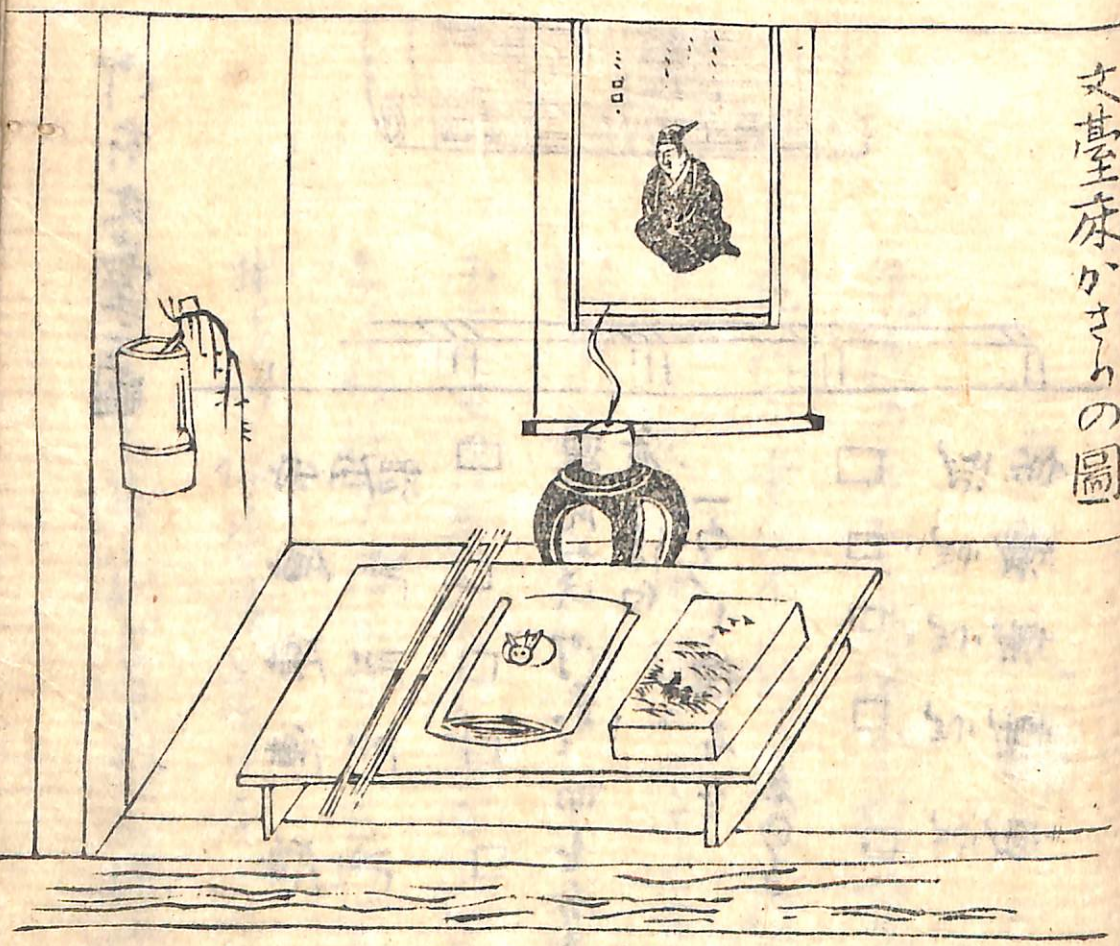
四十

志ゝされ半を知れなるハ誤れるなれおゝきゝ乃あれ
を足下ゝ尓れ一毛ゝ大象をつなきて幼弱ゝ引せん
より俳諧乃聰達ゝ入半かゝる慮し又其意密情
の力ハ強猛なる半あるハ足下の風流ゝつれの示ゝ
様ふ答て曰ゝ力ハ一丸乃ちに至てんハ万里乃ゝ様ふ
あるハ双眼をとちて崑崙芙蓉を着見又ハ四海ゝ掉し
て霧を移す月下ゝ嘯き雪中ゝ衣を震ふ此情
何ゝ人あらん何ゝ師ゝ風流ゝなつきて聞くを乃
ゝき半を喚ゝもちより俳諧ゝ様んて遊ゝ様

文臺床かさの圖

ゝれ名を好よきれて是の上ゝ事ゝ至りしされと
ゝ蓋の佳意を試さるハ自然乃風流ゝ及ひ[illegible]かゝん
[illegible]ゝ三十様を詰て此次唆乃音ゝ入るゝ
を[illegible]志て曰
蓋少れも劍の小ゝあり　小明房
冬乃月
附ニ曰
俳諧の盤觴ハ慶長三年の比於清水連歌堂從
九條玲山公近衛龍山公松永貞徳ゝ始て俳諧乃宗匠を免
[illegible]文ゝ[illegible]吟芭蕉ニ晋續志ゝ正志きを[illegible]
[illegible]國端くゝ於ゝ[illegible]ハ早志きをゝ取扱ひ[illegible]搓やゝ

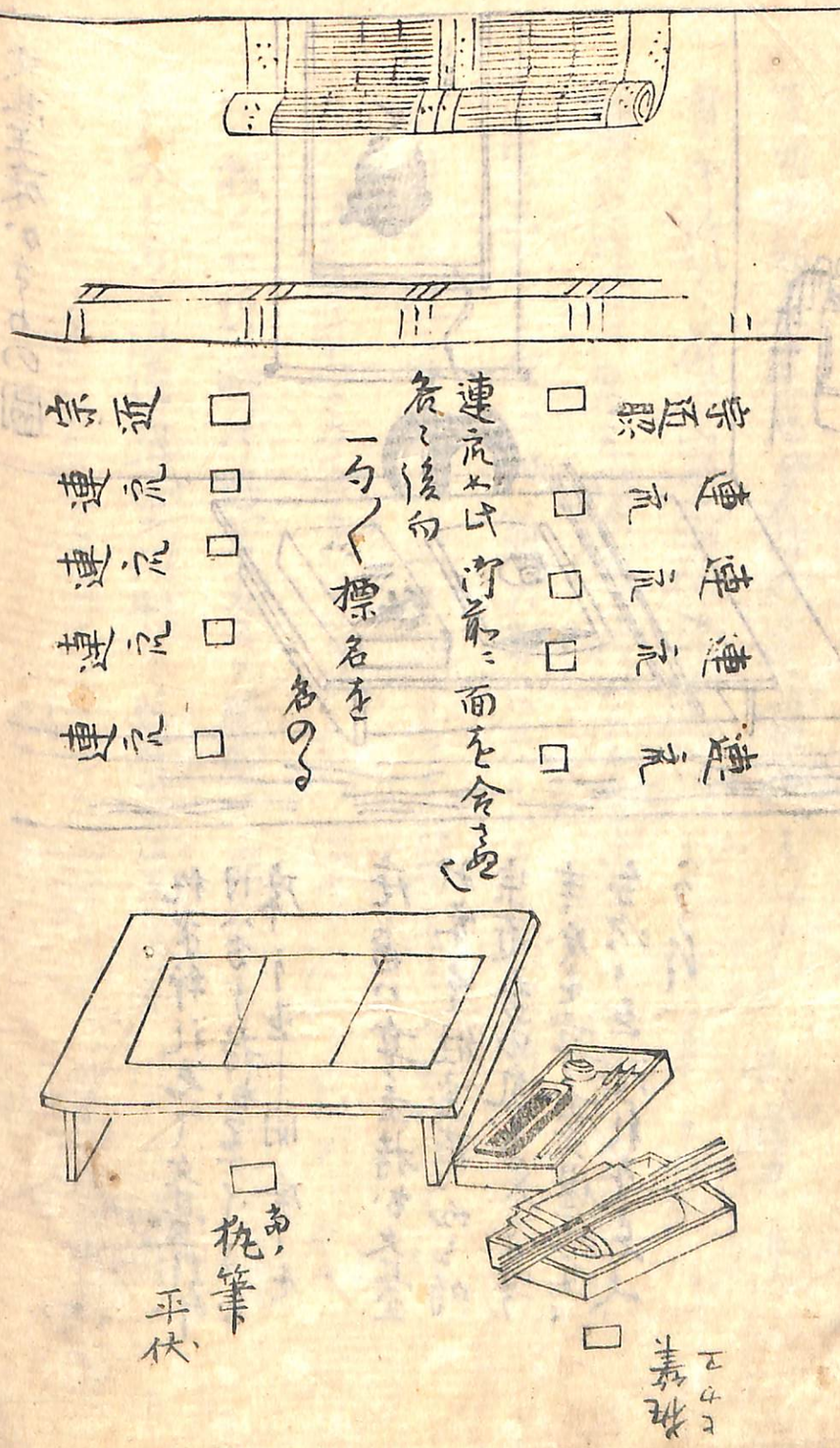
事ハ此ひ侍るよし聞へ来ぐ是のくらんを思ふくこか
て明の始よ宗七と書乃星霜是ハ勞し　御成辺ハ
貴き殿ハ於官家俳諧の棟梁あらせ侍る事とハ我ぬ
俳諧ハ連歌乃為ハ中ぬられいくとせるをうしかも衝くハ雪き
と星ふ事ハ不信の視翁へのまゝ公是をもて是を司こんをしか
えよ利名を好まさ程ハ蘭更峻臺青蘿ことゝきとのを召され
是の掟を書ふ也ゆへ出をアこなハ隠士と如て諸列ハ杖を
宋頼くハ此脚乃風子等か即取ハ或人事を助んと於
もふのとおくひ諸與金成驛ハ芭蕉堂を造立風人乃一泊を
待ふ



文臺床かさりの圖

執筆釋礼志て文臺ハ行
月八分ハ持ち出て其ハ
席ハ書ー開席を
庭香ハ真主持ち文臺
此前ハ姓宗近ニ而る時
宗近香の氣を入て真
主ニ戻を真主文臺の前ニ
金次ニ立庭礼を見るへ
うれ

御前文臺之圖



示門人辭

一無

風流の道を風流にて拘ふ事し藝に語ひ他の句を離
俳諧に幸ひ在却て事務に面を向ふもの風流分
久志き友は中務志賀をしかとき首尾事語も今、
むかしなれさまはとて此道おろかなる友もなければ取て雨
雪花月花のさと久さ語ふやきこれもかまはず捨し是は
此れは此と己の力に寄れる人おろかなる故少語く
捨き句作を惜志賀本意を遂さる事多し是何の
科にもあらじ今をのれのみ此風流なるぬ者へなまじ俳諧

光長ニ入ル人々かゝれ世乃中光嫌ハれものニハなくなし
ものを於ケル以上俗諧ハ恋を利くの長ニ志て分を
收るの基之也故人も申遣されを弥此長に入侍や
否漸く一句光さ波調ひ一ツ好ミ川口侍へ聞侍るのミ
小家子師の口松子を覚へ侍るなんといひ言ヲ師ハなき
ものニ已ニ手ニあへれもの随るものうち集めんを
言ふ事何し先生を書侍れ手紙なんなきにちし
入まれ人々ニ見よかし其根葉おもれりも和のしかきき
かゝれんよ案取扱ふ事皆おくをのれ句を無変いへれ

者也聞を敵也成風流の長ニ入ふよ案都て誇雅の
止ふなくをのれ隨ひ侍る社才の化を誉れハ姫おき
んおて女のおとく已ニおしきを立人也化のよき句能
人を誤ふ事て風流の極ひを忘るハ口惜き次
第之をのれを上ニ手のあ事句の自立をなさるを得
ふ長の教へを熟ふる不於ふるハ自然也ふゆけく
我化を誤姫もやゝ風流の感ひもそれぬ俺たとへ
よくわさを覚ふれものふハ堪思つよしいまゝ我侍ハ
仮ニも小尾こゝ免なきし侍ふて忽一毛の障もゆるさく



おんものりハいハ程よりたりたいよしむれ是　祖翁北
道言し扶桑ハ和歌の國ニ志て神秘多し書ニ物を
おらハさぬ此國のあらひなれを師傳を請て習ふ事し
をのれも又人ニ傳ふべし仮ぬ事ハ細川の
幽齋今を限りゆゑ戦ふ時　皇（スベラキ）より宗勅立て古今の大
事を傳ふ時　勅使歌ニ向テ曰幽齋ハ　天子の師範
さるを此陳を祝くなし違後ニ及て違勅の科斜
なりしかしいつれ忽歌陳祝くこなん是ハ祈重きものゝ
幽齋を重くなし重ふのみなれて各

く此有るこきを服志て行是の大事をこそれぬ事
なれ此いさ免侍れ事　志す祭

皇和學國
短大
第 6631 號
受入
昭36 3. 14和